



あいわい

地域での取組

災害による被害を少しでも軽減するためには、一人ひとりの日頃からの心掛けと地域ぐるみでの防災対策が大変重要です。災害時の被害を小さくするため、区内では、同じ地域に住む方々が自主的に連携して防災対策を行うための自主防災組織が、町内会・自治会及びマンション管理組合により結成されており、その数は72組織となっています。

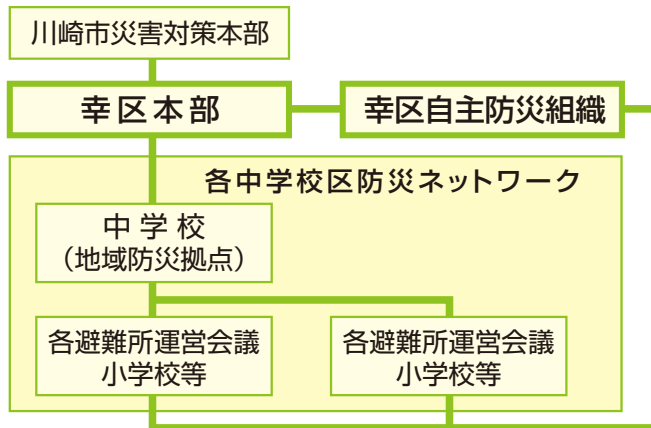
平常時には、防災訓練の実施、啓発活動などを行うとともに、災害時には、地域の情報収集と伝達、救出活動、初期消火活動、避難所運営などを行います。

また、避難所として指定された学校等では、自主防災組織、施設管理者、PTAなどが避難所運営会議を組織して、行政と連携をとりながら避難所運営に関する活動を行っています。避難所運営会議では災害時に避難所の開設がスムーズに行えるよう、避難所ルールの作成、避難スペースのレイアウト、各活動班の役割分担等を検討し災害に備えています。さらに、5つの中学校区ごとに中学校区防災ネットワークを結成し、避難所間の物資や情報の共有を図ります。【右図「区内の防災組織」参照】

災害の被害を軽減するには
自助…一人ひとりが取組むこと
共助…地域や身近にいる人同士が一緒に取組むこと
公助…行政が取組むこと
それぞれを高め、連携して
いくことが重要です。
東日本大震災から2年、行政や地域の取組、自助のため必要なことなどを紹介します。



●区内の防災組織



自助・共助・公助 バランスの取れた 災害に強いまち・幸区を 目指して



interview

緊急時に備えた緊密な四者のチームワークで

東小倉小学校避難所運営会議 (東小倉・鹿島田・パークシティ新川崎)

自主防災組織や学校等との積極的な連携により、地域が一体となった防災活動を展開し、平成23年度には「川崎市自主防災活動功労者表彰」を受けた東小倉小学校避難所運営会議を紹介します。

東小倉小学校を避難所とする3つの町内(東小倉・鹿島田・パークシティ新川崎)。平成23年8月から毎月1回会議を開催し、会議の運営要項、備蓄品の把握などを行い、避難所運営マニュアルを作成しました。

昨年11月に避難所運営ゲーム(HUG)、今年2月に避難所開設訓練を行い、3月11日には小学校と合同で避難所開設訓練を行います。訓練は避難所運営マニュアルをもとに行い、その結果をマニュアルに反映し、より実践的なものへと修正していきます。

この会議の特色の一つは、避難所となる東小倉小学校の積極的な参加です。会議には毎回校長先生と7人の先生が参加。「東日本大震災では中学生が積極的に避難行動を起こし「金石の奇跡」が生まれた。児童や先生が、学校が避難場所になったときをイメージ



できるようにしたい」と神原誠校長は児童の防災意識の向上に期待しています。「防災で大切なのは自助。日頃の備えと判断力」と副委員長の太田敏彦さん。「住民間の絆が一番大切」と考える事務局長の佐々木繁さん。「もっと住民の参加を求めることが必要」と語る委員長の成川慎一さん。

役員だけでは運営できないので、夜間、休日、平日の時間帯別に担い手を募る「避難所運営協力委員」の登録制度を始め、地域ぐるみでの防災活動を進めています。



左から神原誠東小倉小学校校長、太田敏彦さん(副委員長/鹿島田町内会)、成川慎一さん(委員長/東小倉町内会)、佐々木繁さん(副委員長・事務局長/パークシティ新川崎危機管理本部)

みんなが参加してくれる防災訓練にするために

オーベルグランディオ川崎自治会の取組

区内には大規模マンションが多数建設され、子育て世代の転入者が増え、またライフスタイルの多様化により地域コミュニティの希薄化が課題となっています。中でも若い世代を中心に、居住者が一体となって防災に取り組んでいるオーベルグランディオ川崎自治会の取組を紹介します。

入居から9年目を迎える神明町の「オーベルグランディオ川崎」は、11階建て430世帯の大規模マンション。入居2年目から管理組合が自主防災計画を立て、管理組合役員OBなどで構成する自治会を中心に、毎年1回防災訓練を行っています。

当初は「避難するだけの訓練」だった防災訓練も、回を重ねる度に工夫を凝らし、起震車をはじめ防災体験を行うなど、イベント的な要素を盛り込み、昨年9月17日に行われた防災訓練では600人近くが参加しました。「ここで身につけた防災の知恵が、何か一つでもいざという時に役立てばいいと思います」と副会長の加藤勇さん。東日本大震災でも、訓練の効果か住民は公開空地とエントランスに避難しました。

その時に気づいた問題は、当時建物にいた多くが女性か子ども。そこで



立ち上げたのが「ガールズ会」です。普段から女性同士の交流を深め、いつでも連携できるようにしています。また、アンケートの要望から、自助をフォローするアルファ化米の備蓄や防災資機材の整備も進めました。

「東日本大震災でコミュニティや隣近所のお付き合いがいかに大切か、痛感しました。住んでいる方々が顔見知りになることが防犯防災の特効薬です」と副会長の小田浩也さん。

防災活動が活発な理由の一つには、自治会会員の年齢層が30代40代と比較的若く、交流も盛んなことにあります。「若い世代に頑張ってもらって、私たちはサポートしています。若い人が中心になってやれば、どんどん次の世代に回ります」と会長、高橋吉明さんは語ります。



オーベルグランディオ川崎自治会の皆さん。左から藤井康正さん(自治会役員)、小田浩也さん(自治会副会長)高橋吉明さん(自治会会長)、加藤勇さん(自治会副会長)、井上優子さん(ガールズ会会長)